

海底の残骸 日本軍の特攻艇？

館山沖 地元ダイバー発見

太平洋戦争末期に日本海軍が造った特攻艇「震洋」のエンジンなどみられる残骸が、館山市沖の海底で見つかった。館山には当時、震洋の特攻隊基地があり、敗戦時に上官の命令で特攻艇を沖合に沈めたという元兵士の証言と合致する。戦争遺跡研究者は残骸が震洋のものと確認できれば、「貴重な発見。次の世代に語り継ぎたい」と話す。

かつて基地存在 ■ 確認し「次世代に」

残骸を見つけたのは、ダイビングサービスマン「波左間海中公園」を経営する荒川寛幸さん(79)。約半年前、波左間漁港の北西沖約1キロの水深32メートルの海底で、長さ1メートルのエンジンと

直径約30センチのスクリューとみられる金属塊のほか、爆薬とみられる塊を見つけた。館山市波左間には太平洋戦争末期、第59震洋隊(総員176人)の基地があった。防衛省防衛研究所の蔵史料によると、震洋の格納壕や燃料、食糧などの地下壕が建設され、1人乗り震洋53隻と2人乗り震洋5隻が配備予定だった。海岸には発進用のコンクリート

特攻艇「震洋」

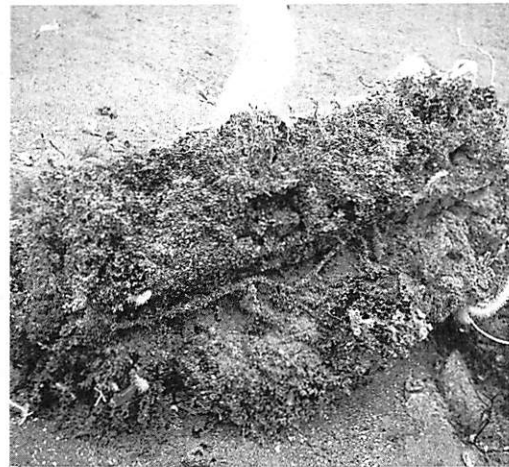
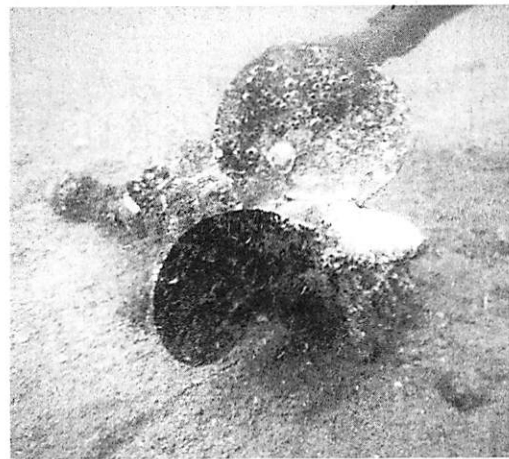
特攻用の木造ボート。1人乗りは全長5メートル、2人乗りは同6.5メートルでそれぞれ爆薬250キロを艇前部に積み、敵船舶に体当たりする。エンジンはトラック用を改造して搭載。船体はベニヤ板のため多く、出撃しても敵艦にたどり着けなかったことも多々ある。6千隻以上が建造され、フィリピンなど海外の基地に配備された。米軍は、震洋11隻(格納壕内で沈没2隻)が接収された記録が残っている。

のものに間違いはない」との答えを得たという。

第59震洋隊の整備兵として終戦を迎えたさいたま市北区の武藤勝美さん(88)によると、基地を撤去する前に20隻ほどの震洋を館山沖に運び、船底に穴を開けて沈めたという。武藤さんは取材に対し、「沈めた場所はまだ覚えていないが、震洋の残骸かもしれない。70年以上たって、まだあったのかと感慨深い」と述べた。

第1発見者の荒川さんは「残骸を保管して、戦争で亡くなった兵隊を供養してくれる人はいないものか」と語る。組織や個人が名乗り出れば残骸の引き揚げに協力するという。

館山の戦跡を調べているNPO法人「安房文化遺産フォーラム」の池田恵美子事務局長は、「もし震洋の残骸なら、歴史の闇に沈められたものの封印が解かれた気がする。加害の歴史の一端が明らかになったことをきちんと受け止め、次世代に語り継いでいきたい」と話した。



①館山市沖で見つかった爆薬とみられる残骸。漁網が何重にもからまっていたという②スクリューとみられる残骸③エンジンとみられる残骸。長さ1メートルありあるという④荒川寛幸さん提供